

奥之坊、中之坊、池之坊、西之坊などの坊号を称している。配札の地は近畿一円はもちろんの事、四国、備前、備後、駿河と多方面にわたっていた。これらの配札先は明治以降の配置売薬の行商先として受け継がれている。山伏は厨子に入れられた仏像を携帯して歩いた。それらは観音、虚空蔵などの菩薩や不動明王、愛染明王などの明王そして毘沙門天、愛宕大権現（勝軍地藏尊）、茶枳尼天（稻荷）などである。これらの仏像は祈祷の本尊として用いられた。天部の像が多いことが特徴である。多賀曼荼羅や虚空蔵尊などの掛軸とともに祈祷（修法）の行軌も残っている。それによると家内安全、五穀豊穡はもとより疝の虫封じ、牛馬の病氣治癒に関するものなど当時の庶民の願いが伺える。

東雲舎には江戸中期以降の貴重な文章が残されている。それによると山伏の生活や配札先などが詳細にわかる。また東雲舎は文化サロンとし句会などが催されていた。松尾芭蕉の句「山蔭は山伏村のひとかまえ」は磯尾か龍法師あたりを詠んだものかもしれない。配札とともに薬を配ったとも伝えられ甲賀の薬業の起源と考えられる。東雲舎には医薬に関する文章も多く存在する。当時は薬の処方も一子相伝の秘密として伝えられ宗教色が強い。

5. 明治維新と磯尾の山伏

明治維新が磯尾の山伏に与えた影響は大きい。幕末には修験に携わる家が26戸（祇園社坊人1戸、愛宕社坊人5戸、伊勢熊野社坊人10戸、多賀社坊人10戸）あったが神仏分離令によりことごとく廃止された。多くの家は浄土宗に改宗したが多賀神社系の神道大成教に入った家もある。修験で生計をたてていた多くの家は薬業へと転じた。明治10年代に修験道が復活すると磯尾、龍法師、新治の旧修験の家が集まり伊勢朝熊修験講社ができた。朝熊山明王院の虚空蔵菩薩像の配札とともに伊勢朝熊万金丹を売り歩くようになる。明治初年に消失した朝熊山金剛證寺の伽藍復興の勧進も行われた。

6. 甲賀の薬業

万金丹などの丸薬は伝承の技術により各家庭内で作っていたが明治の薬制の施行により製薬は許可制（売薬鑑札）になった。磯尾で薬業が盛んになるとともに高度な製薬技術を学ぶため薬学校へ進学し薬剤師となるものも出てきた。また医学校へ進むものもいた。薬業家では主人は雇人とともに昔修験で廻った地に売薬で廻ることになった。妻や家人は家で丸薬の製造にあたった。家内工業の規模が大きくなると大正8年には下磯尾の薬業家が出資して淡海製剤合資会社が設立される。大正12年に株式会社になったが昭和18年に戦時下の企業の統合により滋賀県製薬株式会社となり甲賀町へ移転した。その後の薬業は配置売薬をはじめ製薬会社、薬局薬剤師、薬学研究者などとして受け継がれている。